

「半過去の照応的性格 – 連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」

Le caractère anaphorique de l'imparfait – A travers l'anaphore
associative et l'interprétation des descriptions définies incomplètes

東 郷 雄 二 (Tôgô Yûji)

Dans cet article, nous examinons l'hypothèse avancée dans Berthonneau & Kleiber (1983) selon laquelle l'imparfait serait un temps anaphorique méronomique. L'idée que la relation anaphorique doit être reconnue non pas entre deux points temporels mais entre deux situations nous paraît plausible. Cependant, la situation-antécédent de l'imparfait n'est pas, comme Berthonneau & Kleiber le propose, l'événement décrit dans le contexte précédent à l'aide d'un passé simple ou d'un passé composé, mais la situation qui englobe cet événement. D'ailleurs, pour qu'un imparfait soit plausible, le locuteur et l'interlocuteur doivent partager des renseignements sur cette situation-antécédent. Nous croyons, en adoptant la proposition de Lewis (1979), qu'il y a accommodation de présuppositions. Grâce à cette opération, la situation-antécédent est considérée comme partagée.

キーワード : 半過去 (imparfait), 部分照応 (méronomique), 状況 (situation), 前提の調節 (accommodation de présuppositions), 談話 (discours)

1. はじめに

Berthonneau & Kleiber (1993) (以下 B&K と略す)が、半過去は部分照応 (méronomique) を表す時制であるとして、それまでの半過去研究とは異なる分析を提案したことはよく知られている。彼らの主張は次のようにまとめることができる。

- (A) 伝統的分析では、半過去が表す時間インターバル t_1 が、先行文脈の過去時制などが表す時点 t_2 と同時的である ($t_2 \subset t_1$) とされてきた。しかし照応関係は時点間ではなく、状況間に認めるべきである。
- (B) 半過去が表す状況 s_1 は、先行文脈が表す大きな状況 S_0 の一部 (ingrédient) をなす。 S_0 と s_1 は全体と部分の関係に立つ部分照応 (méronomique) である。
- (C) この全体と部分の関係は、連想照応の先行詞と照応詞の関係と平行的である。次の例が B&K の主張を裏付けるとされている。

- (1) Jean se mit en route avec sa nouvelle Mercedes. (E1) Il attrapa une contravention. (E2)
Il *roulait* trop vite. (E3) / ?Il *roulait* avec plaisir. (E3')

半過去 Il *roulait* trop vite. と照応関係にある先行詞は、「ジャンが交通違反で捕まった時の状況」 S_0 で、Il *roulait* trop vite. が表す状況 s_1 は状況 S_0 の部分であり ($S_0 \supset s_1$)、交通違反で捕まる原因として S_0 の適切な一部となるため半過去は容認されるとする。一方、Il

roulait avec plaisir.の容認度が低い理由は、この文が表す状況 s_2 が「ジャンが交通違反で捕まった時の状況」 S_0 の一部にはなりにくいからとしている。「楽しく運転していた」のは交通違反で捕まる原因ではなく、全体・部分の関係を成さないというのが B&K の主張であった。Il roulait avec plaisir.の容認度の低さは伝統的な同時性説では説明しにくいから、B&K 説の優位を表す根拠とされたのである。

この分析に対する批判として、主なものに Molendijk (1996), Wilmet (1996), Tasmowski-De Ryck & de Mulder (1998), Jayez (1998), de Mulder & Vetter (1999) などがあり、国内でも市川 (1999), 春木 (1999), 大久保 (2002) などがある。本稿ではその批判を逐一取り上げて検討する余裕がないが、B&K 説に最も都合が悪いのは Paul entra. Marie faisait la vaisselle. のような incidence の例であることは間違いない。 $s_1 = \{\text{Marie faisait la vaisselle.}\}$ が $S_0 = \{\text{Paul entra}\}$ の部分を成すという説明が難しいからである。B&K 説では S_0 と s_1 は連想照応における家と屋根のように全体・部分の関係を成さなくてはならないが、「ポールが入って来た」と「マリーが皿を洗っていた」が全体・部分の関係を成すとは考えられない。B&K もこの例が自説に不利なことを認めた上で、矛盾は見かけ上のものにすぎないと反論し、Houweling (1986) の structure du monde 説を援用して次のような主張を行なった。「半過去の先行詞となる状況は出来事のこともあるが、出来事を含むより大きな状況のこともある。あらゆる出来事は単独で起きるのではなく、他の出来事や状況を含む大きな世界で起きる。問題の例では、『マリーが皿を洗っていた』は、『ポールが入って来た』の部分なのではなく、『ポールが入って来た』という出来事を含むより大きな状況の部分である」(p.70)

しかし、このように半過去の先行詞の定義を拡張すると、どんな半過去でも容認される結果になりかねない。(1) で「ジャンが楽しく運転していた」という状況は、「ジャンが交通違反で捕まった」を含むより大きな状況「ジャンはメルセデスを運転してドライブしていた」を設定すれば、その一部を成すと言えなくもない。ならばこの半過去は容認されるはずだが事実はそうではない。また諸家から次のような反例も寄せられた。

(2) Paul entra dans la cuisine. *Le président de la République trompait sa femme.

(Molendijk 1994)

(3) Paul entra. ?? Marie partait en vacances. (Tasmowski-De Ryck & de Mulder 1998)

(4) J'ai acheté un perroquet hier. ?*Il était vert et avait des ailes rouges. (Herslund 1987)

Molendijk が半過去の容認度を左右する鍵とするのは「談話の一貫性」(cohérence textuelle) で、(2)では第1文と第2文の間に意味的一貫性がないので半過去はおかしいが、ポールが大統領の妻の兄か大統領お抱えのコックなら半過去の容認度は上がるとする。(3)の容認度は低いですがポールが入って行った時マリーが荷造りをしているなどの目に見える兆候があれば容認度が上がるとされている。(4)を引用した Wilmet (1996)は Herslund の容認度の判定は厳しすぎるとしつつも、J'ai acheté を J'ai vendu に変えたり、後半を現在時制にすると容認度が改善されるという観察には同意している。また Tasmowski-De Ryck & de Mulder (1998) からは次のような反例も寄せられた。

- (5) Jean est décédé. *Il *rendait* son dernier soupir à 21 heures.
- (6) L'édifice s'écroula. *La bombe *explosait*.
- (7) Jean est tombé. *Marie le *poussait*.

(5)で「最後の息を引き取った」は「ジャンが亡くなった」の部分であるはずなのに、B&K説に反して半過去は不可である。また(6)の「爆弾が爆発した」は「建物が倒壊した」の原因であり、(7)の「マリーが押した」は「ジャンがころんだ」の原因なのに、いずれも容認されない。これらは全体・部分の関係に基づくB&Kの部分照応説では容認されるはずだというのが彼らの反論である。

このような議論を背景として、本稿ではやや錯綜した議論に陥った感のある半過去=照応説を整理し、次の主張を行なう。

- (A) 半過去が非自足的時制であるという意味において半過去は照応的時制である¹⁾。
 - (B) 半過去の時点 t_1 と先行する時点 t_2 の同時性ではなく、半過去の表す状況 s と他の状況 S との重なりを考えるべきとしたB&Kの主張は正しい。
 - (C) しかしB&Kが状況間の関係を連想照応になぞらえたのは誤りで、不完全定名詞句の意味解釈のメカニズムと比較するべきである。
 - (D) 半過去が表す状況 s は、より大きな状況 S の一部である。この状況 S は、先行文脈が構築することも、話し手・聞き手間の前提の調節により語用論的に構築されることもある。この意味で半過去の分析には談話的観点が不可欠となる。
 - (E) 半過去が表す状況 s は、より大きな状況 S に適切に埋め込まれなくてはならない。この埋め込みを保証するのは文法ではなく、最終的には私たちの共有知識である。
- 本稿の中心を成す主張は(C)(D)なので、まず次節で不完全定名詞句の意味論を検討する。

2. 不完全定名詞句と資源状況

不完全定名詞句は言語学よりも分析哲学で多く論じられてきた現象で(Strawson 1950, Salmon 1981, Soames 1986, Reimer 1992), *The table is covered with books.*の定名詞句 *the table* が一例である。もしこの文が *There was a table and several chairs in Bill's room.*に後続するならば単純な *a table*→*the table* の文脈照応であり、*Jane entered the kitchen.*に後続するならば *the kitchen*→*the table* の連想照応なので、特に問題とするには当たらない。ところが文脈照応や連想照応だと明確に判定できないケースが現実には多数存在する。

- (8) Sophie dormait. *Le journal* était tombé au pied du lit, *le cendrier* était plein à ras bord.
(Charolles 1990)
- (9) Elle ouvrit les yeux. Un vent brusque, décidé, s'était introduit dans *la chambre*. Il transformait le rideau en voile, faisant se pencher *les fleurs* dans leur grand vase, à terre, et s'attaquait à présent à son sommeil. (F.Sagan, *La chamade*)

(8)は日常の発話としてはやや唐突だが、小説の一節ならば容認できる例とされている。先行文脈 *Sophie dormait.*から *le journal* と *le cendrier* を連想照応によって導くことはできない。

(9)は小説の冒頭部分で先行文脈はなく、*la chambre, les fleurs* を連想照応の例とするのは難しい。ところが(8)(9)を小説として読む読者は、問題の名詞句を定かつ唯一の指示対象を持つものと適切に解釈するのだが、この定名詞句の意味解釈はどのように生じるかが問題なのである。分析哲学では不完全定名詞句の唯一性が論じられることが多いが、その理由は Russell (1905)の定名詞句の分析に唯一性条件が付けられていたからである。

(10) The professor was drunk.

$\exists x [\text{professor}(x) \wedge \text{drunk}(x) \wedge \forall y (\text{professor}(y) \rightarrow y=x)]$

論理式の前半では「酔っている教授 x がいる」ことが、後半では他の教授 y がいたとしても x と同一である、すなわち他の教授はいないことが述べられており、定名詞句は唯一の指示対象を表すとされている。しかし世の中には教授は大勢おり、問題の時点で酔っている教授も大勢いることが考えられ、このままでは唯一性は成り立たない。このため普通は、例えば「昨日大学で開かれた言語学科の新年会」のように、文脈的に限定された領域で解釈されるという但し書きが付く。しかし談話解釈の立場からは、どのような具体的手順で解釈領域が文脈的に限定されるかが問題であり、古典的意味論ではこの問題は不問にされることが多かった。Soames (1986)は状況意味論の考え方に基づいて、次のような解決策を提案した。文中の f は確定記述、すなわち定名詞句を表す。

“The referential interpretation requires f to be defined on a contextually supplied **resource situation** – typically, one that is given perceptually, or through preceding discourse. (...) What is new is its appeal to situations (rather than possible worlds), as models of partial (rather than total) information. The significance of this shift shows up in the analysis of incomplete definite descriptions – descriptions that have (unique) referents when evaluated in parts of reality, but not in the world as a whole.” (Soames 1986)

要約すると、不完全定名詞句は「世界全体」と相対的に解釈するのではなく、世界の一部である資源状況 (resource situation) と相対的に解釈されるべきだということである。*The table is covered with books.*では「世界全体」を領域とすれば机は無数にあり、本が山積みみの机も多数あるはずで、机の唯一性は成り立たない。しかし、「A 君が昨日の午後 3 時に入った B 先生の研究室」という時空間的に限定された資源状況を解釈領域とすれば、机の唯一性は成り立つ (B 先生の研究室に複数の机があるケースは便宜上除外する)。この考え方を状況意味論に基づく「部分モデル」(partial model) と呼ぶ。

この部分モデルが定名詞句の唯一的存在を保証するのだが、これが連想照応と同じ概念ではないことに注意したい。連想照応は *un stylo – la plume* や *le restaurant – le menu* のように、個体間に成り立つものである²⁾。*un stylo* や *le restaurant* は個体であり、不完全ながらも一般の照応過程と同じく先行詞と見なすことができる。しかし部分モデルは状況と個体の間に成立する関係であり、この点で連想照応のメカニズムとは異なる。

さらに部分モデルと連想照応の最大の違いは、時間変数を含むか否かである。連想照応

は個体間の安定した関係であり時間変数を含まない. *un stylo — la plume* なら「万年筆にはペン先が付いている」という関係は時間に関係なく成り立つ. しかし部分モデルが想定する状況は時間変数を含み刻々変化する. (9)では主人公の女性が目を覚ました時点 t_1 における状況 s_1 は, 個体として *la chambre, les rideaux, les fleurs* などを含むが, 主人公が着替えて台所にいる時点 t_2 における状況 s_2 は, 個体として *le café, le pain, le journal* などを含むかも知れず, もはや *les fleurs* は含まないことは明らかである. 個体間の関係であり恒久的に成立する連想照応とは異なり, 状況は談話の進行とともに時々刻々変化する. B&K は半過去の解釈メカニズムを連想照応になぞらえる一方で, 半過去と「先行詞」の関係を状況間の関係と定義したが, 彼らは時間変数を無視するという矛盾を犯している.

部分モデルに基づくこのような意味解釈のメカニズムを, 本稿では比喩的に「茶碗とお盆の論理」と呼ぶことにする. 茶碗が定名詞句でお盆が資源状況である. 茶碗はそれ自体では定の解釈を受けることができない. 茶碗に定と唯一性の意味を与えるのはお盆であり, 不完全定名詞句は状況に埋め込まれて初めて解釈可能となるという意味で「不完全」なのである. 本稿ではこの茶碗とお盆による分析が半過去にも有効であることを以下述べる.

3. 時制の照応的性格再考

そもそも時制の照応的性格を指摘したのは Partee (1984) である. *Sheila had a party last Friday and Sam got drunk.* の *got* は *had* と無関係な過去の時点を表わせない. サムはシエラのパーティーとは別の時に泥酔したという意味になるからである. *had* と *got* は同時でなくてはならず, この意味で *got* は *had* に束縛されて照応的に働くと Partee は考えたのである.

しかし本稿は照応的性格を過去時制自体に帰する分析は正しくないと考える. *had* と *got* が同時と解釈されるのは, 両者の時点間に同一指示が成り立つからではない. 名詞句・代名詞等の指示表現は対象を指示する力を持つが, 時制に過去の時点を示す力はないからである. *Sheila had a party.* の *had* は, *last Friday* のような時の副詞句を取り去れば単に過去であることしか表さず, どの時点かまでを指示する働きはない. 一見 *got* が *had* に束縛されるように見えるのは, 「シエラがパーティーを開いた状況」と「サムが泥酔した状況」とが重なると解釈するのが妥当だからである.

Partee に続いて照応と時制の間の平行関係を指摘した研究に Tasmowski-De Ryck & Vetters (1996) がある. 彼らは単純過去と不定名詞句, 複合過去と指示形容詞句, 半過去と定名詞句の平行性を主張した. 単純過去が新たな時点 t_1 を導入するように, 不定名詞句 *Un garçon est venu.* は新たな指示対象 *garçon* (x) を導入し, 両者とも談話に対して存在量化的に働く. 複合過去は話し手の発話時点から捉えた過去の事態を, 指示形容詞句は話し手からの直示を表し, 両者とも指標的 (*indexical*) という共通点がある. そして *J'ai acheté une pomme et une poire. La pomme était pourrie.* では, 定名詞句 *la pomme* は新たな指示対象を導入せず *une pomme* と照応関係に立つように, 半過去 *était* も新たな時点を導入せず *J'ai acheté* が指定した過去の時点を引き継ぐというのである. ただし著者たちは半過去と定名詞句の類似性の原因として, 両方とも意味解釈にあたって *cadre relationnel* を必要とするからと述べるに留まっている.

4. 資源状況に基づく半過去の分析

第1節の主張(A)で述べたように、本稿ではB&Kと同じく半過去は照応的時制であると考える。ここで照応的と言うのは、ある言語形式Xと別の言語形式Yが同一の談話切片中に共存しているとき、Yの意味解釈がXに決定的に依存している場合を言う。

B&Kとの違いは何と何の間に依存関係を認めるかである。B&Kは(1)のE2とE3の間に全体・部分の関係があるとしたが、本稿ではE2を含むより大きな状況 S_0 が半過去を解釈する資源状況になると考える。つまり(1)の半過去 *roulait* が表す状況 s_1 は、 $E2=\{\text{Il attrapa une contravention.}\}$ ではなく、E2を含むより大きな状況 S_0 の一部として解釈されなければならない。 S_0 は概略「ジャンが交通違反で捕まった時の状況」で、E2の時空変数が指定する時空間に含まれるすべての小状況を潜在的に含む(ex. *Il faisait beau., Jean écoutait la radio., La route était presque déserte., etc.*)。半過去 *Il roulait trop vite.* の表す s_1 が資源状況 S_0 の一部として矛盾なく適切に含まれるとき($s_1 \subset S_0$)、この半過去は適格と判定される。「スピードを出しすぎていた状況」は「交通違反で捕まった時の状況」の一部として意味的関連性が有意であり適格と判定される。

本稿の分析の利点は、B&K説にとって障害となる *Paul entra. Marie faisait la vaisselle.* のような *incidence* の半過去も同じように分析できる点にある。*Paul entra.* が起きたときの大きな状況を S_0 、*Marie faisait la vaisselle.* が表す状況を s_1 と置くと、半過去の適格条件は同じく $s_1 \subset S_0$ である。「ポールが台所に入って行った」時、「赤ん坊が泣いていた」「美味しそうな料理の匂いが漂っていた」「マリーが皿を洗っていた」などは状況 S_0 に矛盾なく含まれる小状況である。しかし「目の前をトラックが疾走していた」や「空に星が瞬いていた」などは状況 S_0 に適切に含まれると見なすのは困難である。

では本稿の提案する分析では(1)の? *Il roulait avec plaisir.* の容認度の低さはどう説明できるだろうか。*Il attrapa une contravention.* が起きた時の大きな状況を S_0 、*Il roulait avec plaisir.* が表す状況を s_2 とする。半過去の適格条件は $s_2 \subset S_0$ だが、 S_0 = 「ジャンが交通違反で捕まった時の状況」の中に、 s_2 = 「彼は楽しく運転していた」が含まれることを妨げるものは時間関係という点では何もない。「楽しく運転していて捕まる」ことは時間関係の上では十分可能である。ここに欠けているのは状況間の両立可能性である。制限速度を守っていれば、「楽しく運転している」状況と「警察に交通違反で捕まる」状況は両立しない。この包含関係は文法的知識ではなく、私たちの世界についての知識に属する。

(1)の? *Il roulait avec plaisir.* に(11)のように *pourtant* を加えると容認度が向上することが指摘されている。「楽しく運転していた」状況と「警察に捕まる」状況が逆接関係を表す *pourtant* で結合されることで、警察に捕まる原因となる他の状況 S_3 (スピードを出し過ぎていた、信号無視した、etc.) を前提として言外に要請するため容認度が向上するのである。 $s_2=\{\text{Il roulait avec plaisir.}\}$ だけでは資源状況 S_0 に適切に含まれることはできないが、警察に捕まる原因となる他の状況 s_3 が想定されることで、いわば s_3 が s_2 と S_0 の仲立ちとして働き、 s_2 が S_0 に含まれるよう調整すると考えられる。

- (11) *Jean se mit en route avec sa nouvelle Mercedes. Il attrapa une contravention.
Il roulait pourtant avec plaisir. (Berthonneau & Kleiber 1999)*

不完全定名詞句が資源状況に適切に埋め込まれて完全な解釈を得るように、半過去も資源状況として働くより大きな状況に適切に埋め込まれることで安定した解釈を得る。

5. 状況とイベントタイプ

さて本稿の分析は談話の一貫性(*cohérence textuelle*)による説明とどう違うのだろうか。s₁がS₀に「適切に含まれる」とは談話の一貫性に他ならないとする見方もあるかもしれない。半過去を談話の一貫性によって説明する立場は Molendijk(1996)に代表される。

Molendijk(1996)は半過去の表す状況と先行詞のそれとの間には *causalité/explication*, *manière/précision*, *arrière-plan*, *conséquence/résultat*, *incidence* などのテキスト的關係が成り立たねばならないとする。しかしこのような談話の一貫性の原理だけでは、Molendijk(1996)自身が挙げている次例を説明できないことに注意しよう。

- (12) Jean se mit en route avec sa vieille Fiat. Il attrapa une contravention. *Il brûlait un feu rouge.

「信号を無視する」は「交通違反で捕まる」の原因である。Molendijk の言うように *causalité* というテキスト的關係が半過去の容認度を決定するなら容認されるはずである。

B&K や Molendijk の議論がしばしば擦れ違いの様相を呈する原因は、彼らの用いる「状況」という概念の規定の不十分さにある。本稿では状況は時間変数を含み $s(t)$ と表現できると考える。状況とは基本的にある瞬間における状態である。時間軸を比喩的に丸太に譬えると、状況とは時点 t_1 において丸太を切断した切り口であり時間幅を持たない³⁾。「状況」という用語は *état des choses* と解釈されるため、時間的に変化のない継続した状態と見なされることが多いがこれは誤解であり、丸太の切断面のように時間幅を持たないと考えるべきである。

さて(12)で *attrapa* が指定する時点を t_1 とし、*brûlait* が表す状況を $s(t_1)$ と書く。*brûler* (*un feu rouge*)は Vendler の言う到達動詞(*achievement*)であり、動詞の表すイベントの開始点と終結点の時間インターバルは極小である。一般に終結点を持つイベントタイプを表す到達動詞・達成動詞(*accomplishment*)が半過去に置かれると、イベントの開始点は通過したが終結点に達していないことを表す。例えば *Jean partait quand je l'ai vu.* では Jean は「立ち去ろうとしていた」のであり、まだ立ち去っていない。同様に(12)では Jean はまだ信号無視をし終えていない。未だ終結点を迎えていないイベントは信号無視ではない。このために *brûlait* が表す状況 $s(t_1)$ は *Il attrapa une contravention.* を含む資源状況 S₀ の一部として適切に含まれることができない。これが(12)の容認度の低さの原因である。一方、(12)の最後の文を *Il brûlait les feux rouges.* に変えると容認される。この変化はイベントタイプの変更による。*brûler* (*les feux rouges*)は活動動詞(*activity*)であり終結点を持たない。従ってイベントの開始点を通過すれば事態は成立したものと見なされて、交通違反で逮捕された状況 S₀ と両立可能となる。このことは「状況」を考える場合、動詞の表すイベントタイプが重要であることを意味している。

- (1)の *Il roulait trop vite.* について、「交通違反で捕まった時点で Jean は停止しており走っ

ていないので、この半過去の状況は *Il attrapa une contravention.*の一部には成り得ないのではないか」と思われるかも知れない⁴⁾。仮にこの意見に従うと、(1)は本稿の説のみならず伝統的な同時性説でも説明できない例となる。しかし本稿では *roulait* の状況は *Il attrapa une contravention.*の一部に成り得ると考えるが、その鍵はイベントの内部構造にある。ひとつのイベント E は部分を構成するサブイベント {e1, e2, e3, ... eN}の集合から成り、イベントタイプによってはサブイベントの一部が成立した時点で E が成立したと見なせるものがある。E={attraper une convention}では e1=「警官に交通違反を発見される」、e2=「パトカーで追跡される」、e3=「停止を命じられる」、e4=「違反切符を渡される」などが E を構成するサブイベントと考えられる。すると e1 と e2 の時点では Jean の車はまだ走っている。従って *Il roulait trop vite.*の状況 s_1 は *Il attrapa une contravention.*を含む資源状況 S_0 の一部として含まれることができる。

状況が時間変数を含むと考え、動詞のイベントタイプを考慮することで(5)(6)(7)の容認度の低さも説明できる。(5)の *rendre (son dernier soupir)*は到達動詞であり、半過去では開始点は通過したが終結点を迎えていないことを表す。従って Jean は最後の息を引き取り終わっていないので、第1文の *Jean est décédé.*と矛盾する。(6)の *exploser* も到達動詞であり、(5)と同様に終結点を迎えていないのだから爆弾はまだ爆発し終わっていない⁵⁾。ならば建物が倒壊することはないはずで第1文と矛盾する。(7)にも同じことが言える。

(1)の *Il roulait trop vite.*との違いは動詞のイベントタイプである。*rouler* は活動動詞なので、開始点を通過すれば後は均質なイベントである。だからどの時点で捕まっても交通違反と認定される。ところが *rendre (son dernier soupir)*や *exploser* は到達動詞なので均質なイベントではなく、かつ終結点に達しなければイベントが成立したと見なすことができない。(1)が容認され(5)(6)(7)が容認されないのはこのためである。

6. 談話冒頭の半過去

B&K 説に対する批判のひとつに、談話冒頭の半過去が説明できないというものがある。物語などの談話の冒頭で半過去が用いられ、*imparfait d'ouverture* という名前で呼ばれることがある。例えば次がその例である。

- (13) *Delphine et Marinette revenait de faire des commissions pour leurs parents, et il leur restait un kilomètre de chemin. (M.Aymé, Les contes du chat perché)*

このような例では半過去の先行詞となる状況を文脈上認めることができないため、B&K 説には不利な事実となる。B&K はここでも Houweling の *structure du monde* 説を援用しているが説得的とは言い難い。そのような苦しい説明に陥らざるを得ない理由は、B&K の分析には談話的視点が決定的に欠如しているからである。第1節の主張(D)で述べたように、本稿は時制は優れて談話的現象であると考え、時制研究には談話的視点が不可欠だという立場に立つ。談話冒頭の半過去では、先行詞の状況は文脈的に与えられるのではなく、話し手(書き手)と聞き手(読み手)の協調によって語用論的に構築されると考える。

Stalnaker (1978)は断定とは可能世界を狭めることだとした。例えば「太郎は目を覚まし

た」という断定の時点では、「まだ夜中だった」「もう陽は高く昇っていた」「夕方だった」はすべて両立可能な世界だが、続けて「もう陽は高く昇っていた」と断定すると、「まだ夜中だった」「夕方だった」の可能性は排除される。この考え方に従えば、断定を連ねることは現実世界と合同になるまで可能世界を順次狭めて行くことに他ならない。

しかし談話理解にとって重要なのは断定と対を成す前提である。「太郎は目を覚ました」という発話は、ある世界(例えば小説の描く世界)における「太郎」の存在と、「寝ていた」という状態を前提とする。「太郎は目を覚ました」が短篇小説の冒頭の一行であったとすると、この二つの前提はどのように保証されるのだろうか。冒頭なので前提を生み出す先行文脈はない。しかし協調的な読者は「太郎」という固有名の使用により「太郎」という人物の存在を受け入れ、「目を覚ました」のだから寝ていたにちがいないと理解する。つまりここでは前提は言語文脈によって生み出されているのではなく、当該の発話の理解に必要なものとして協調的な聞き手によって構築されているのである。

談話とは話し手と聞き手の間で相互行為として産出されるものであり、話し手と聞き手はできるだけ矛盾のない談話理解を実現するために協調的に働く。その協調作業のひとつに前提の調節がある。これを次のように定式化したのは Lewis (1979) である。

Accommodation of presupposition

"If at time t something is said that requires presupposition P to be acceptable, and if P is not presupposed just before t , then - *ceteris paribus* and within certain limits - presupposition P comes into existence at t ." (Lewis 1979)

上の例では物語の冒頭の時点 t で「太郎」は存在前提 P を持たないが、「太郎は目を覚ました」という発話の理解のためにはその前提が必要である。協調的な読者は前提の調節を行ない、「太郎」の存在前提 P を自分の前提集合 Σ に付加するのである⁹⁾。

談話冒頭の半過去の場合も同じ操作が起きると考えられる。小説の協調的な読者は、*Delphine et Marinette revenait de faire des commissions...* という発話により、*Delphine* と *Marinette* という個体が存在し *revenait* が表す状況 s_1 を一部として含み得る資源状況 S_0 を構築する。この資源状況は「*Delphine* と *Marinette* が存在し買い物から戻ってくる」と矛盾しない可能世界の集合で、これ以外の残りの部分は未定義であり、談話の進行とともに定義されて行くと考えられる。その操作は聞き手(読み手)における心的構築作業で、談話理解はこのような一連の作業と見なすことができる。

半過去に先行する出来事(状況)を先行詞とする B&K の分析では談話冒頭の半過去は説明できないのは批判する諸家の言う通りである。しかし時制を談話的視点から分析し、話し手と聞き手の間での前提の調節という談話的操作を認めることによって、半過去が解釈される資源状況を正しく規定することができる。

また談話冒頭の半過去は時点間の関係に基づく伝統的な「同時性説」だけでは不十分なことも示している。談話冒頭の半過去では先行詞となるべき時点が存在しない。時点間の関係に基づく分析では、この不在の時点がどのように与えられるかを説明することができない。話し手と聞き手の間での前提の調節という談話的操作を認めると、半過去の表す状

況が埋め込まれる資源状況がどのように生み出されるかを説明できるのである。

7. 半過去と状況の共有

B&K は時点間の同時性という伝統的な半過去の分析を批判し、状況間の部分照応という説明を提案したが、伝統的分析にせよ B&K の部分照応説にせよ、同一指示または（部分）照応という文法的説明の範囲に終始していることに変わりはない。前節で強調したように本稿では半過去の分析には「話し手」「聞き手」「前提集合」「共有」といった談話的操作概念が不可欠と考える。この点で Tasmowski-De Ryck & Vetters (1996)は興味深い指摘をしている⁷⁾。

- (14) [昼間に雨が降り、止んだその夜にパーティーで出会った人の会話]
a. *Qu'est-ce qu'il pleuvait, n'est-ce pas ?
b. Qu'est-ce qu'il a plu, n'est-ce pas ?
(15) a. *Dis donc, ce pantalon, tu l'achetais quand ?
b. Dis donc, ce pantalon, c'est quand encore que tu l'achetais ?

(14)では半過去の容認度は低く複合過去が適切である。その理由は、昼間の激しい雨という状況を共有しているかどうか、会話の開始時点では話し手にとって不明だからである。相手は昼間ずっと地下の部屋にいて、雨に気づいていなかったかもしれない。しかし、昨日雨が降り、話し手と聞き手がいっしょに雨宿りの場所を探したという経験を共有し、翌日にその出来事について話している場合なら半過去は許容されるという。この観察は半過去が解釈されるべき資源状況が話し手と聞き手で共有されることが、半過去にとって必要な条件であることを示している。同様に何の前提もなく「いつズボンを買ったのか」をたずねる質問では、(15)a. の半過去は不適切だという。しかし(15)b.のようにズボンを買った状況を思い出そうとし確認を求める場合ならば半過去の容認度は向上するという。これらの例は半過去を文法的観点のみから考察するのは不十分であり、談話的視点が必要不可欠であることを示している。

(15)について B&K は、*quand* 節で半過去は使えないとする Tasmowski の分析に反論し、次の例を挙げている。

- (16) *Quand est-ce, déjà, qu'elle allait chez le médecin ? Je ne me rappelle plus.*

しかし *déjà* や *Je ne me rappelle plus.* が示すように、これは前提なしのいきなりの発話ではなく、聞き手が情報を保持していることを前提とした「思い出し」の文脈で、この例も話し手と聞き手による状況の共有が必要であることを図らずも示しているのである。

8. おわりに

本稿では半過去は部分照応の時制であるという B&K の仮説を批判的に検討し、半過去の照応的性格を状況間に求める B&K の立場を支持しつつも、先行詞となる状況は出来事

自体ではなく出来事を含むより大きな資源状況と見なすべきであることを論じた。同時に資源状況は文脈的に与えられるのみならず，談話的協調により語用論的に構築されることもあることを示した。以上を通じて，半過去を正しく分析するには，話し手と聞き手による談話操作を含む談話的視点が必要不可欠であることを論じた。 (京都大学)

[注]

- 1) 本稿で扱うのは東郷(2007)で定義した *récit* の半過去であり，*discours* の半過去は照応的ではないと考えているが，紙幅の関係で詳細は別稿に譲る。
- 2) *Jean roulait vers Versailles. La voiture est tombée en panne sèche.* では，[rouler-vers-Versailles]と [la voiture]の間に広義の連想照応を認める研究者もいる。これはイベントと個体間のケースである。しかしこの場合も[rouler-vers-Versailles]は概念的型(知識)であり時間変数を持たないと考えられるので，本稿の議論には直接影響しない。
- 3) 状況が時間幅を持たないため，状況に含まれることができるのは Carlson の言う局面 (stage)に限られる。このことは *Quand j'ai croisé Marie, elle était pâle / en colère / *blonde / *mince.* のように，*quand* 節が指定する時点 t_1 において局面レベル述語は許容されるが個体レベル述語は許容されないことで確かめることができる。
- 4) 本稿の査読委員の一人から寄せられたコメントである。
- 5) *explorer* は瞬間動詞であり，開始点は通過しているが終結点に達していない状態を想像することは日常的常識では難しいが，敢えて想像すると次のようになる。導火線を用いた古典的爆弾を想定すると， e_1 =「導火線に点火する」， e_2 =「導火線が燃え進む」， e_3 =「炸薬に着火する」， e_4 =「炸薬全体が発火する」， e_5 =「爆発的に膨張する」などがサブイベントである。開始点は通過しているが終結点に達していない状態とは，例えば e_1 から e_2 まで進行し， e_3 以下がまだ成立していない状態ということになる。
- 6) 小説のような書き言葉と日常の話し言葉では前提の調節の許容度に差がある可能性が高い。日常会話で「昨日，三枝さんに会ったよ」と知らない人の名前を出されたら，協調的な対話者でも前提を無条件に受け入れず，「えっ，三枝さんって誰?」と聞き返して知識状態の不均衡を補正するメタ談話的行動に出るだろう。一般に日常の話し言葉の方が知識状態の不均衡を許容しないため，前提の調節の発動は控えられると考えられる。しかし小説のように仮構世界を読者として受動的に受容することが慣習化されている談話タイプでは，前提の調節の発動にそれほど抵抗がないと考えられる。
- 7) (14)(15)は *récit* の半過去ではなく *discours* の半過去の例である。注 1)で述べたように *discours* の半過去は照応的ではない。しかし「状況の共有」という条件は両者に共通だと本稿では考えているが，詳述する紙幅の余裕がないため詳細は別稿に譲る。

[参考文献]

- Berthonneau, A.-M. & G. Kleiber (1993), "Pour une nouvelle approche de l'imparfait : l'imparfait, un temps anaphorique méronomique" , *Langages* 112, 55-73.
- Berthonneau, A.- M. & G. Kleiber (1999),"Pour une réanalyse de l'imparfait de rupture dans le cadre de l'hypothèse anaphorique méronomique", *Cahiers de praxématique* 32, 119-166.

- Charolles, M. (1990), "L'anaphore associative : problèmes de délimitation", *Verbum* 13-3, 119-148.
- De Mulder, W. & C. Vetters (1999), "Temps verbaux, anaphores (pro)nominales et relations discursives", *Travaux de linguistique* 39, 37-58.
- Jayez, J. (1998), "DRT et imparfait. Un exemple de traitement formel du temps", J. Jayez et al. (eds) *Le temps des événements. Pragmatique de la référence temporelle*, Kimé, 123-156.
- Herslund, M. (1987), "Catégories grammaticales et linguistique textuelle : la catégorie du temps en français", *Copenhagen Studies in Language*, CEBAL Series 10, 89-108.
- Houweling, F. (1986), "Deictic and Anaphoric Tense Morphemes", V. Lo Casio & Co Vet (eds) *Temporal Structure in Sentence and Discourse*, Foris, 161-191.
- Lewis, D. (1979), "Scorekeeping in a language game", *Journal of philosophical logic* 8, 339-359.
- Molendijk, A. (1994), "Tense use and temporal quantification : the 'passé simple' and the 'imparfait' of French", Co Vet et al. (eds) *Tense and Aspect in Sentence and Discourse*, De Gruyter, 21-47.
- Molendijk, A. (1996), "Anaphore et imparfait : la référence globale à des situations présupposées ou impliquées", W. de Mulder et als. (eds) *Anaphores temporelles et (in-)cohérence*, Cahiers Chronos 1, Rodopi, 109-124.
- Partee, B. (1984), "Nominal and temporal anaphora", *Linguistics and Philosophy* 7, 243-286.
- Reimer, M. (1992), "Incomplete descriptions", *Erkenntnis* 37, 347-363.
- Russell, B. (1905), "On denoting", *Mind* 14, 479-493.
- Salmon, N. U. (1982), "Assertion and incomplete definite descriptions", *Philosophical Studies* 42, 37-45.
- Soames, S. (1986), "Incomplete definite descriptions", *Notre Dame Journal of Formal Logic* 27, 349-375.
- Stalnaker, R.C. (1978), "Assertion", P. Cole (ed) *Pragmatics. Syntax and Semantics* 9, Academic Press, 315-332.
- Strawson, P. F. (1950), "On referring", *Mind* 59, 320-344.
- Tasmowski-De Ryck, L. & C. Vetters (1996) "Morphèmes de temps et déterminants", W. de Mulder et al. (eds) *Anaphores temporelles et (in-)cohérence*, Cahiers Chronos 1, Rodopi 125-146.
- Tasmowski-De Ryck, L. & W. de Mulder (1998), "L'imparfait est-il un temps méronomique ?", Sv. Vogeeler. et al. (eds) *Temps et discours*, Peeters. 171-190.
- Wilmet M. (1996), "L'imparfait : le temps des anaphores ?", W. de Mulder et al. (eds) *Anaphores temporelles et (in-)cohérence*, Cahiers Chronos 1, Rodopi, 199-215.
- 市川雅己(1999)「半過去の機能について」『フランス語学研究』33, 65-69.
- 大久保伸子(2002)「切断の半過去について — Huit jours plus tard, elle mourait...」『フランス語学研究』36号, 14-29.
- 東郷雄二(2007)「Je t'attendais.型半過去再考」『フランス語学研究』41, 16-30.
- 春木仁孝(1999)「新しい半過去の構築に向けて— Le Goffic, Ducrot, Berthonneau et Kleiberを批判する」『言語文化研究』25, 143-165.